

WSSFアウオード・ディナーレポート

山崎 恵司(共同通信記者)

年に一度、トップクラスの女性スポーツ選手と、彼女たちを支える人たちが全米各地から集まります。日本でもはやく米国のようになりたいものです。

米国のWSSF(WOMEN'S SPORTS FOUNDATION)は年に一度、パーティー形式で盛大に表彰式を行う。年が明け、いざさか旧聞になってしまつて恐縮だが、昨年十月四日に催された表彰式の模様を紹介したい。

会場となつたのは、ニューヨーク市マンハッタンのウォルドーフ・アストリア。米国の大統領や訪米した各国元首が宿泊することゝ有名な、格式の高いホテルだ。そこに、全米から七十人を超すトップクラスの女性スポーツ選手と元選手が集まつた。みんな、いつものユニホーム姿ではなく、目いっぱいドレスアップし、華やかなムードが漂う。

出席者はそうそうたる顔ぶれ

出席者は、陸上、水泳、バレーボール、バスケットボール、ゴルフ、フィギュアスケートなどのほか、アイスホッケーや犬ぞり、ビリヤードなどの選手も。もちろん、なかには有名人も含まれる。日本でおなじみの人といえば、テニスのクリス・エバートやフィギュアスケートのクリスティー・ヤマガチ、

陸上のフローレンス・グリフィス・ジョイナー、ジャッキー・ジョイナー・カーシーといったところか。

午後六時半からカクテル・パーティーが始まり、同七時半から表彰式を兼ねたディナーに入った。先ほど、名前を挙げたような有名人は招待された人たち。それ以外に九百人前後の出席者がいたが、この人たちは会費を払つてゐる。このパーティーの目的の一つは、基金を集めること。従つて、会費は、

かなり高い。個人で出席する場合は一人五百ドル。テーブルを借り切る場合は五千ドル、七千五百ドル、一万ドルの三ランクに分かれていた。こうしたテーブルは、女性スポーツ財団の活動に理解を示す企業が借りののだが、それにしても一つ十人前後のテーブルが約五十万(一百万円)もして、それが売れてしまうのだからすごい。日本でなら、たとえ景気がよくても考えられないことだ。さて、表彰式に話を移そう。十四回目の今回から、変更が加えられた。『スポーツウーマン・オブ・ザ・イヤー』はこれまでプロとアマ、一人ずつに贈られていた。それが、チームスポーツと個人競技から一人ずつを選び、表彰

することになった。そのほかの表彰は、国際女性スポーツの殿堂に選ばれた選手、女性スポーツ・ジャーナリズム賞、女性スポーツ財団創設者の名前をとつたビリー・ジョン・キング貢献賞である。この貢献賞には、我がWSSFジャパン代表の三ツ谷洋子さんも候補に挙げた。惜しくも受賞はならなかったが、近い将来に日本女性が表彰されるのを取材したいものだ。

『スポーツウーマン・オブ・ザ・イヤー』。日本語を当てるはめるなら、年間最優秀女性選手、か。表彰式の目玉ともいえる賞。チーム部門から選ばれたのはテキサス工科大バスケットボールのシユリル・スウィープス選手、個人部門は、競馬のジュリー・クローン騎手だった。この二人について、説明したい。

まず、スウィープス選手。抜群の得点力で、テキサス工科大を全米大学体育協会(NCAA)トーナメント優勝に導いた。決勝で47得点したが、これは男女を通じてのNCAAトーナメント決勝での最多得点記録。ちなみに、これまでの記録はビル・ウォルトン(UCLA)カリフォルニア大ロサンゼルス校)が一九七三年にマークした43得点。バスケットボール・ファンにはおなじみの名選手がマークした記録を二十年ぶりに更新したのが、スウィープス選手である。後半に挙げた24得点も新記録。次々に数字を塗り変える活躍で、NCAAトーナメントの最優秀選手に選ばれている。こうした働きて、バスケットボール関係の賞を総ナメにした。米国唯一の全国紙USAトゥデイや最も人気のあるスポーツ週刊誌スポーツ・イラストレイテッドなど八つの違ったメディアや団体から年間最優秀選手に選出された。現在はイタリアでプレーしている。日本リーグの女子が外国人選手を締め出さなければ、ひょっとすると日本でそのプレーが見られたかもしれない。

米国の競馬界では、トリプル・クラウンと呼ばれる三大レースがある。ケンタッキー・ダービー、ブリーダーズ・カップ、ベルモント・ステークスである。コロンビア・アフエアーに騎乗したクローン騎手は昨年のベルモント・ステークスを制した。女性が三大レースに勝つのは史上初の快挙だ。しかし、クローン騎手はいつ勝つてもおかしく

ないだけの実績を積み重ねていた。一九九二年には278回も1位に入り、九百十萬^{ドル}(約九億一千万円)を稼いだ。これは、米国の全騎手中、九番目の高額だ。また、生涯獲得賞金がことし五千万^{ドル}(約五十億円)の大会に乗った。これも女性では初めてのこと。

昨年八月三十日、レース中の落馬事故で、大ケガを負った。足を骨折し、現在はリハビリテーションに励んでいる。骨折した部分を金属性のプレートとネジで固定、復帰を目指しているが、表彰式には松葉杖をつけて出席した。

今回、国際女性スポーツの殿堂に選ばれた元選手は二人。一九八四年、ロサンゼルス五輪体操の女子個人総合で金メダルを獲得したメアリ・ルー・レットンさんと、同五輪の水泳で3個の金メダルを獲得するなど、大きな足跡を残したメアリ・マーハーさんである。レットンさんの人気は衰えず、AP通信の調査で『もともと人気のあるスポーツ選手』に選ばれたほど。マーハーさんのニックネームは『マダム・バタフライ』。その名の通り、一九八一年にマークした百^{メートル}57秒93、二百^{メートル}2分5秒96のバタフライ2種目の世界記録はいまだに破られていない。米国の女子スポーツにおける二人の存在は大きい。

また、殿堂の先駆者部門には、野球の黒人リーグで男性にまじりプレーしたトニ・ストーンさん、一九三二年の

リーグブラシッド冬季五輪で初めて女子スピードスケートが公開競技として採用されたときに出場したキット・クライン・アウトランドさん(故人)が選ばれた。先駆者部門は、一九六〇年以前に目覚ましい実績を残した人を選ぶもの。ストーンさんは一塁手として活躍、伝説の投手として有名なサッチエル・ペイジ氏からヒットを打ったこともあるという。一九九一年、他の黒人リーグの選手とともに米大リーグ野球殿堂にも入っている。故アウトランドさんは米女子スピードスケートの草分け。一九三五年、ノルウェーでの世界選手権で千^{メートル}1分42秒の世界記録をマークし、翌年の五輪では公開競技だった千^{メートル}と三千^{メートル}に優勝した。

もう一つ、コーチ部門では、UCL Aソフトボール部のシャロン・バック監督が殿堂入りを果たした。バックさんの戦歴は、すごい一言。十八年間の通算成績は707勝/136敗3分け、勝率8割3分6厘。全米一に七度輝いた。基本を徹底させる指導方法は定評がある。殿堂入りにふさわしい実績だといえる。

女性スポーツを支える人たち

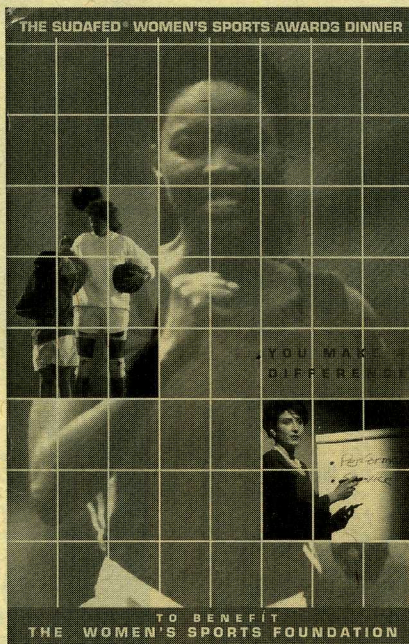
女性スポーツ・ジャーナリズム賞に移ろう。これは六つの部門に分かれている。受賞者は、次の通り。▽日刊紙「ジュリー・カートさん(ロサンゼルス・タイムズ)▽週刊誌「ミッシェル・コ

ートさん(LAウィークリー)▽ワシントン・ポスト)▽雑誌「マデレーン・ブレイスさん(ニューヨーク・タイムズ・マガジン)▽ローカルテレビジョイス・リッチマンさん(WGN)▽ネットワークテレビ「アーメン・ケティアンさん、マイク・マルタスさん(ABCニュース)

このほか、スポーツイラストレイテッド誌のゲリー・スミスさんにも特別賞が贈られた。いずれも、女性スポーツを取り上げ、選手の肉体的な葛藤周囲の環境、スポーツにおける差別と闘う姿などを描いている。いまだに女性スポーツという、差別的な見出しをつけるスポーツ新聞を含めた日本のスポーツ・ジャーナリズムと比較すると、米国は真正面から取り上げる姿勢がある。もちろん、日本と同じようにスポーツに取り組み女性を茶化すメデ

イアもあるが、女性スポーツ財団の狙いは、こうした表彰を通じて、スポーツ・ジャーナリズムの世界から差別的な見方をなくしていこう、ということかもしれない。

ビル・ジョン・キング貢献賞を受賞したのは、メルポメーネ女性健康調査研究所の創立者、ジュディ・ルッターさん。一九八二年に同研究所を設立、女性スポーツをいろいろな角度からリサーチしながら、女性や少女のために、フィットネスなど健康を増進するプログラムについて教育用の資料なども作成してきた。ちなみにメルポメーネというのは、最初の近代オリンピック・マラソンで走ったとされるギリシャ人女性の名前だという。ルッターさんは研究者であるのと同時に、活動家でもある。女性スポーツ財団も含め、各種の女性スポーツ団体に参加し、女性スポーツの発展に貢献してきた。



▲WOMEN'S SPORTS AWARDS DINNERのプログラム